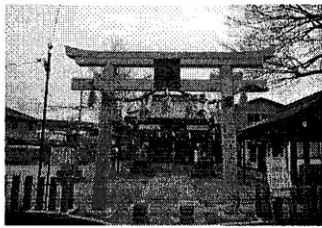


「御供田八幡神社と安楽寺」
路地沿いの旧跡をめぐる



前回紹介した雨水貯留施設（古堤街道）に沿って東へ歩いていくと、右手に八幡神社の社殿が見えてきます。当社は、元禄年間（17世紀末頃）に石清水八幡宮（現・京都府八幡市）から御供田村の氏神として勧請されたと言われています。境内には、創建後間もない元禄12年（1699）の銘が刻まれた灯籠があります。

八幡神社の鳥居を出て南へ40メートルほど歩いていくと、細い路地に突き当たります。そこから東へ向かうと、すぐに獅子吼山安楽寺が見えてきます。当寺は、阿弥陀如来木像を本尊とする浄土真宗本願寺派の寺院で、創建年代は不明ですが、少なくとも宝暦年間（18世紀中頃）までには本堂や庫裏などが整備されていたようです。門の東側の地藏堂の前には、「願主 角堂 米安」と刻まれた安政3年（1856）建



御供田八幡神社



「角堂」と刻まれた碑



御供田公園の相撲場

立の願掛け碑が立っています。願主の米安は当時物流拠点として栄えていた角堂浜で活躍した人物だったのかも知れません。住道の地名の由来となった角堂の名を今に伝える貴重な文化財です。

さらに路地を東へ向かい、旧家の前を通り抜けると、正面に再び恩智川の堤防が見えてきます。堤防の手前で右手に曲がると、御供田公園に入ります。公園の中央には平成6年に開かれた屋根付きの立派な土俵があります。この土俵は、地元の相撲大会のほか、大阪場所の時期には現役力士の稽古にも利用されています。また、公園の北側には、江戸時代初期の大坂城再築工事の際に切り出されたといわれる自然石がありますが、この石の由来については次回紹介します。

（生涯学習課）

「残念石と小豆洗いの話」
御供田地区にまつわる伝承



御供田公園の北側に高さ約1.3メートルの大きな自然石があります。伝承によると、今から400年ほど前、当地付近で大坂城の再築工事に用いる石を積んだ舟が沈む事故がありました。その後、深野池の開発により田畑となった当地では、村人たちがたびたび病気になるという奇妙な現象が起こり、村人は事故で命を落とした人の霊の仕業と考え、土盛りをして供養を執り行うようになったそうです。

現在残る自然石は、公園が作られる際に土盛りが削られてしまったため、昭和47年（1972）に地元の有志によって新たに設置されたものです。地元では、運搬途中に落ちた石は縁起が悪いとされ石垣に用いられることはなく、「残念石」と言われました。市内にはこ



御供田公園の「残念石」



北西方向から見た御供田新橋

のような残念石にまつわる伝承が各地に伝わっています。

御供田公園を後にし、恩智川に沿って北側へ歩いて行くと、正面に御供田新橋が見えてきます。以前も紹介したように、かつて恩智川はこの橋の辺りで西向きに流路を変え、現在雨水貯留施設となっている場所を流れていました。川の南岸を古堤街道が通り、御供田新橋の辺りには「久太の橋」が架かっていました。村人は川岸をヒナラ（洗いや場）として利用していましたが、氏神の八幡神社裏手のヒナラに行くと、小豆を洗うような不思議な音がどこからともなく聞こえたことから、小豆洗いの妖怪が出るという言い伝えが広まったそうです。

昭和40年代に恩智川の流路が付け替えられ、まちの風景が変化するとともに、残念石や小豆洗いの伝承を知る人も次第に少なくなりましたが、いずれも大東市を代表する民話として語り継ぎたいものです。

次回御供田新橋を渡り、平野屋方面へ向かいます。
（生涯学習課）